

平成二十三年度前期日程 入学試験問題

小論文 C

教育学部

学校教育教員養成課程

言語・社会教育系

国語選修……………1～6ページ

注意事項

- ① 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- ② この冊子には課程・選修・コース別に問題が出されているので、選択を間違えないようにしなさい。横書きの問題は裏表紙から始まります。
- ③ 解答は、別紙の解答用紙に、指定字数に従って、縦書きで記入しなさい。
- ④ 受験番号は、解答用紙一枚ごとに指定の欄に記入しなさい。
- ⑤ 解答用紙の「問いの番号」の欄に、「問一」または「問題一・問一」のように記入してから答えなさい。
- ⑥ 冊子内の課程・選修・コース別の中表紙に注意書きがあるので、解答する前に必ず読みなさい。

学校教育教員養成課程

言語・社会教育系 国語選修

注意

問一・二は解答用紙(その一)を、問三は解答用紙(その二)を用いて答えなさい。

問題

次の文章は、芥川龍之介の作品「蜜柑」（大正八年）の全文である。これを読み、後の問に答えなさい。

なお、本文の表記は原則として末尾に示す出典の通りとしたが、漢字のふりがなは、原文に記載されたものに加え、現代通行の読みとは異なるものについて特に付した。

また、*番号を付した語句等について、本文の後に一括注記した。

或曇^{ある}った冬の日暮^{ひぐれ}である。私は横須賀^{よこすか}発上^{はつじやう}り二等客車の隅^{すみ}に腰を下^{おろ}して、ぼんやり発車の笛を待つていた。とうに電燈のついた客車の中には、珍^{めづ}らしく私の外に一人も乗客はいなかった。外を覗^{のぞ}くと、うす暗いプラットフォオムにも、今日は珍しく見送りの人影さえ跡を絶^たつて、唯^{ただ}、檻^{おり}に入れられた小犬が一匹、時々悲しそうに、吠^ほえ立てていた。これらはその時の私の心もちと、不思議な位似^{おと}つかわしい景色^{おと}だった。私の頭の中には云いようのない疲労と倦怠^{けんたい}とが、まるで雪曇りの空のようなどんよりした影を落^おしていた。私は外套^{がいとう}のポケットへじつと両手をつつこんだまま、そこにはいつている夕刊を出して見よう^{おこ}と云う元氣さえ起^{おこ}らなかった。

が、やがて発車の笛が鳴^なった。私はかすかな心の寛^{くわん}きを感じながら、後の窓枠^{まどわく}へ頭をもたせて、眼の前の停車場がずるずると後^{のち}ずさを始めるのを待つともなく待ちかまえていた。ところがそれよりも先にけたましい日和下駄^{ひよりげた}の音が、改札口の方から聞^きえ出したと思うと、間もなく車掌の何か云い罵^{のの}る声と共に、私の乗っている二等室の戸ががらりと開いて、十三四の小娘^{おんな}が一人、慌^{あわ}しく中へはいって来た、と同時に一つずしりと揺れて、徐^{おも}に汽車は動き出した。一本ずつ眼をくぎって行くプラットフォオムの柱、置き忘れたような運水車、それから車内の誰かに祝儀の礼を云っている赤帽——そう云うすべては、窓へ吹きつける煤煙^{ばいえん}の中に、未練がましく後へ倒^たれて行^いった。私は漸^{よう}くほつとした心もちになって、巻煙草^{まきたばこ}に火をつけながら、始めて懶^{もろ}い睨^{まが}をあげて、前の席に腰を下^{おろ}していた小娘の顔を一瞥^{べつ}した。

それは油気のない髪をひつつめの銀杏^{いちょう}返しに結^むつて、横なでの痕のある軼^{ひび}だらけの両頬^{ほお}を気持^{きもち}の悪い程赤く火照^ほらせた、如何^{いか}にも田舎者^{いなかもの}らしい娘^{むすめ}だった。しかも垢^{あか}じみみた萌黄色^{もえぎいろ}の毛糸の襟巻^{えりまき}がだらりと垂^たれ下^おった膝^{ひざ}の上には、大きな風呂敷包^{ふし}み

あつた。その又包みを抱いた霜焼けの手の中には、三等の赤切符が大事そうにしつかり握られていた。私はこの小娘の下品な顔だちを好まなかつた。それから彼女の服装が不潔なものやはり不快だつた。最後にその二等と三等との区別さえも弁えない愚鈍な心が腹立たしかつた。だから巻煙草に火をつけた私は、一つにはこの小娘の存在を忘れたいと云う心もちもあつて、今度はポケットの夕刊を漫然と膝の上へひろげて見た。するとその時夕刊の紙面に落ちていた外光が、突然電燈の光に変わつて、刷の悪い何欄かの活字が意外な位鮮に私の眼の前へ浮んで来た。云うまでもなく汽車は今、横須賀線に多い隧道の最初のそれへはいつたのである。

しかしその電燈の光に照らされた夕刊の紙面を見渡しても、やはり私の憂鬱を慰むべく、世間は余りに平凡な出来事ばかりで持ち切つていた。講和問題、新婦新郎、瀆職事件、死亡広告——私は隧道へはいつた一瞬間、汽車の走っている方向が逆になつたような錯覚を感じながら、それらの索漠とした記事から記事へ殆機械的に眼を通した。が、その間も勿論あの小娘が、あたかも卑俗な現実を人間にしたような面持ちで、私の前に坐つている事を絶えず意識せずにはいられたなかつた。この隧道の中の汽車と、この田舎者の小娘と、そうして又この平凡な記事に埋つている夕刊と、——これが象徴でなくて何であろう。不可解な、下等な、退屈な人生の象徴でなくて何であろう。私は一切がくだらなくなつて、読みかけた夕刊を抛り出すと、又窓枠に頭を寄せながら、死んだように眼をつぶつて、うつらうつらし始めた。

それから幾分か過ぎた後であつた。ふと何かに脅されたような心もちがして、思わずあたりを見まわすと、何時の間にか例の小娘が、向う側から席を私の隣へ移して、頬に窓を開けようとしてゐる。が、重い硝子戸は中々思うようにあがらないらしい。あの軋だらけの頬は愈赤くなつて、時々鼻涙をすすりこむ音が、小さな息の切れる声と一しよに、せわしく耳へはいつて来る。これは勿論私にも、幾分ながら同情を惹くに足るものには相違なかつた。しかし汽車が今將に隧道の口へさしかかろうとしている事は、暮色の中に枯草ばかり明い両側の山腹が、間近く窓側に迫つて来たのでも、すぐに合点の行く事であつた。にも関わらずこの小娘は、わざわざしめてある窓の戸を下そうとする、——その理由が私には呑みこめなかつた。いや、それが私には、単にこの小娘の気まぐれだとしか考えられなかつた。だから私は腹の底に依然として険しい感情を蓄えな

がら、あの霜焼けの手が硝子戸を擡げようとして悪戦苦闘する容子を、まるでそれが永久に成功しない事でも祈るような冷酷な眼で眺めていた。すると間もなく凄じい音をはためかせて、汽車が隧道へなだれこむと同時に、小娘の開けようとした硝子戸は、とうとうぱたりと下へ落ちた。そうしてその四角な穴の中から、煤を溶したようなどす黒い空気が、俄に息苦しい煙になつて、濛々と車内へ漲り出した。元来咽喉を害していた私は、手巾を顔に当てる暇さえなく、この煙を満面に浴びせられたおかげで、殆息もつけない程咳きこまなければならなかつた。が、小娘は私に頓着する気色も見えず、窓から外へ首をのばして、闇を吹く風に銀杏返しの鬢の毛を戦がせながら、じつと汽車の進む方向を見やつてゐる。その姿を煤煙と電燈の光との中に眺めた時、もう窓の外が見る見る明るなつて、そこから土の匂や枯草の匂や水の匂が冷かに流れこんで来なかつたなら、漸咳きやんだ私は、この見知らない小娘を頭ごなしに叱りつけてでも、又元の通り窓の戸をしめさせたのに相違なかつたのである。

しかし汽車はその時分には、もう安々と隧道を迂りぬけて、枯草の山と山との間に挟まれた、或貧しい町はずれの踏切りに通りかかつていた。踏切りの近くには、いずれも見すばらしい藁屋根や瓦屋根がごみごみと狭苦しく建てこんで、踏切り番が振るのであろう、唯一旒のうす白い旗が懶げに暮色を揺つていた。やつと隧道を出たと思う——その時その蕭索とした踏切りの柵の向うに、私は頬の赤い三人の男の子が、目白押しに並んで立つてゐるのを見た。彼等は皆、この曇天に押しすくめられたかと思う程、揃つて背が低かつた。そうして又この町はずれの陰惨たる風物と同じような色の着物を着ていた。それが汽車の通るのを仰ぎ見ながら、一齐に手を挙げるが早いか、いたいけな喉を高く反らせて、何とも意味の分らない喊声を一生懸命に迸らせた。するとその瞬間である。窓から半身を乗り出して例の娘が、あの霜焼けの手をつとのばして、勢よく左右に振つたと思うと、忽ち心を躍らすばかり暖な日の色に染まつてゐる蜜柑が凡そ五つ六つ、汽車を見送つた子供たちの上へばらばらと空から降つて来た。私は思わず息を呑んだ。そうして刹那に一切を了解した。小娘は、恐らくはこれから奉公先へ赴こうとしている小娘は、その懐に藏していた幾顆の蜜柑を窓から投げて、わざわざ踏切りまで見送りに来た弟たちの労に報いたのである。

暮色を帯びた町はずれの踏切りと、小鳥のように声を挙げた三人の子供たちと、そうしてその上に乱落する鮮な蜜柑の色と——すべては汽車の窓の外に、瞬く暇もなく通り過ぎた。が、私の心の上には、切ない程はつきりと、この光景が焼きつけられた。そうしてそこから、或得体の知れない朗な心もちが湧き上つて来るのを意識した。私は昂然と頭を挙げて、まるで別人を見るようにあの小娘を注視した。小娘は何時かもう私の前の席に返って、相不変軼だらけの頬を萌黄色の毛糸の襟巻に埋めながら、大きな風呂敷包みを抱えた手に、しっかりと三等切符を握っている。……………

私はこの時始めて、云いようのない疲労と倦怠とを、そうして又不可解な、下等な、退屈な人生を僅に忘れる事が出来たのである。

(芥川龍之介「蜜柑」(『蜘蛛の糸・杜子春』(新潮社(文庫)、一九八四年)より。同書三〇〜三四頁)

*注

1. 窓へ吹きつける煤煙 …… 当時の列車の先頭車両は蒸気機関車であり、動力源となる石炭を燃やした際に煤煙を排出した。
2. 二等と三等との区別 …… 当時の列車の座席は三等級に分かれていた。「二等」は現在の普通座席。「二等」の運賃は「三等」の二倍程度となっていた。
3. 瀆職 …… 「汚職」に同じ。
4. 索漠とした …… 心を慰めるものもない。味気ない。
5. 一旒 …… 「旒」は助数詞。旗を数える。
6. 蕭索とした …… ものさびしい。うらぶれた。
7. 喊声 …… さげび声。
8. 幾顆 …… 「顆」は助数詞。丸い物を数える。
9. 昂然と …… 自分の能力や行き方に自信・誇りをもち、意気さかな様子。

問一 ——線①、「その時の私の心もち」について、本文の表現に即して説明しなさい。(三〇〇字以内)

問二 ——線②、「まるで別人を見るようにあの小娘を注視した」とあるが、語り手「私」は「娘」を当初どのように見ており、今この時点ではどのように見ていると言えるか、説明しなさい。(二〇〇字以内)

問三 「蜜柑」が本作品において果たしている役割を、作品中に現れた「色」を中心として論じなさい。(五〇〇字以内)